1507年　永正4年

政権の流れ　将軍家→細川政元→澄之・澄元・高国→晴元→氏綱　┌三好→松永→信長→秀吉→家康→将軍家
享徳・応仁の乱　明応の政変　戦国時代　天下統一　大坂の陣

細川家の父子兄弟、骨肉の争いとなる

澄之が父政元を暗殺
澄元が澄之を殺害
澄元が政権を取る

①澄之が父政元を殺して政権を取る
細川政元は後継者問題に決着をつけるため、澄元を細川家の惣領に、澄之を丹波守護にしようと考えていたが、この思いも空しく6月、反政元派の蜂起によって、二人の後継者を巡る両派の騒擾が始まった。その経緯は去る5月、丹後守護一色義有と若狭守護武田元信との間で戦いが起こり、政元が武田元信支援を決めて澄之を丹後に出征させたところから展開する。この時、反政元派が澄之とそそのかして政元暗殺計画を練り上げた。さっそく一色方の加悦城を攻めていた澄之が同城を石田直経と謀叛して急襲氏を丹後に引き寄せ、ここで月待の行水を使っていた政元を暗殺したのである。その余勢を駆って澄之はさらに京都にある澄元の勢力を撃ち破って、遂に京都を制圧した。こうして澄之と反政元派が京都を占拠し、澄之が細川家の惣領として幕府の実権を握ることとなった。だがそれは家の間の実権であった。
の間の実権であった。

②澄元が澄之を殺して政権を奪う
7月、澄元に通じていた政元派が、早速反撃に転じた。最初の火の手は澄之派の内部分裂から起こった。澄之派の築瀬寺長忠の子方他丸が澄元に内応して、長忠の居城茶木城を陥落させたのである。それに次いで細川政元には七夕一人の後継者高国が澄元側に加わって澄之を京都の館に襲撃したのである。ここで澄之は殺害され、京都から澄元派が一掃された。かくして一転澄元派が京都を制圧し、ここに澄元政権が誕生した。はかなくも澄之の天下はたった10日間の幻に終わった。

③三人目の後継者高国が台頭、新たな火種となる
細川家は政元が死に、澄之も死んだ。その過程で旧政元政権の内実はおおかた没落し、澄元の弟澄一好之長がその勢域を拡大していった。ところがその一方で二好之長に反対する勢力が生まれ、細川の国とんだ内紛を担ぎ上げた。やっと澄元が政権を取った矢先に再び細川家が分裂したのである。こんどは細川家が澄元派と高国派に分かれて、まさに自滅論争へと突き進んでいく。その結論は翌年より始まる。

④大友義長が妙見城を奪回する
3月、大友義長は尼野寺泰の妙見城を攻撃した。すると城兵たちが主君尼野寺泰を殺して降伏してきたため、妙見城は再び大友義長の手に帰った。

⑤長尾為景が越後を乗っ取る
8月、長尾為景は守護上杉房能に対してクーデターを敢行した。対する上杉房能は勝利の使節を挑めたが、駆け付けてくれる国人もなく、やむなく府中を逃げ出した。一行は関東への近道である安塚街道をひたまりに進れたが、松之山温泉を過ぎて天水越に差し掛かった時、追いすがる長尾方の兵衆・上野らに包囲され、上杉房能をはじめ同行衆ともども切腹して果てた。そもそもこの事件は、上杉房能が謀反を起じて長尾為景を討とうとしたため、為景がその先制攻撃を仕掛けたものとしているが、その実、為景の心底には南北朝以来の越後守護支配体制を打破して、国人達自政権を設立したいという彼の目標があった。今やそれが実現し、上杉房能の養子定実を新守護に擁いて越後国主の座に就いたのである。守護定実は単なる傀り物、その実権は、いうまでもなく長尾為景が握った。

将軍	義澄→義尚	政知→義稙
	義稙→義澄	政知→義澄
	義澄→義稙	政知→義澄
	三好之長→足利義稙	政知→義澄
畠山尚順	義就→基家	政長→尚順
	尚順→政長	政長→尚順
細川勝元	政元→澄之	澄之→澄元
	澄元→高国	高国→氏綱
畠山尚順	尚順→政長	政長→尚順
	尚順→尚順	尚順→尚順
上杉	山内憲房	憲房→憲房
	扇谷定正	朝興→朝興
北条早雲	氏綱→氏康	氏康→氏康
公方	成氏→政氏	高基→晴氏
	政氏→高基	晴氏→義氏

1533年　天文2年

政権の流れ　将軍家→細川政元→澄之・澄元・高国→晴元→氏綱　┌三好→松永→信長→秀吉→家康→将軍家
享徳・応仁の乱　明応の政変　戦国時代　天下統一　大坂の陣

本願寺が細川晴元に反旗を翻す

①本願寺一向一揆が細川晴元に反旗を翻す
昨日の友は今日の敵、細川晴元は、これまで本願寺一向一揆の力を借りて敵の喉元を狙う足利義維・一族の三好長慶を討ったが、こんどは味方であるはずの本願寺一向一揆がその矛先を晴元に向けて働いたのである。細川晴元には、本願寺宗徒の驚くべき行動力とその勢力の絶大な威力に驚くばかりであった。9月には晴元の立場は大きく揺れ、2月には晴元が居す堺を攻められた。曖昧な態度のあった本願寺一向一揆の攻撃に支えきれなくなった細川晴元は、ついに海路淡路へ脱出。多年に渡って細川氏の領国であった摂津の大半および堺が本願寺宗徒の支配下となることとなったのである。

請元が法華一揆と連合して本願寺一揆を弾圧
細川晴元はこの事態を挽回するために、当時宗論で対立していた法華宗徒を味方に付けて本願寺一向一揆の弾圧を図った。それが功を奏して本願寺勢力がやや弱体化した。その隙を突いて9月、細川晴元は淡路から脱出して芥川城へ入り、ここから法華一揆と連合して本格的な本願寺一揆討伐を始めることになる。

②細田信秀が尾張随一の実力者となる
7月、細田信秀は自己の勢力を上げるために巧みな方策に出た。公家の春日井雅朝一山科言継らを唆・和歌の伝授に尼張へ招き、京から来訪した高貴な公家言継一向に接待するという体裁をとって、周辺諸氏を細田信秀の孤る勢域城に訪れさせたのである。この言継は、ちょうど、三河・尾張一帯を巡っていた。本願寺宗徒の一揆の中心人物の一人であった。そこで、言継は、この機会を利用して、三河・尾張一帯の有力者に対して、細田信秀の実力を誇示するように、細田信秀の実力を誇示するように、細田信秀の実力を誇示するように

1507年　永正4年

政権の流れ　将軍家→細川政元→澄之・澄元・高国→晴元→氏綱　┬三好→松永→信長→秀吉→家康→将軍家
享徳・応仁の乱　明応の政変　戦国時代　天下統一　大坂の陣

細川家の父子兄弟、骨肉の争いとなる

①澄之が父政元を殺して政権を取る

細川政元は既婚者問題に決着を付けるため、澄元を細川家の懐刀に、澄之を養子縁に、とそれぞれ定めたが、かしこの思い通りにはいかず、反政元派の暗躍によって、二人の後継者を巡る両派の暗闘が始まった。その経緯によると、月後守護一色義有と若狭守護武田元信との間で戦いが起こり、政元が武田元信を援護して澄之を丹波に派遣させたことから顕現する。この時、反政元派が澄之をそそのかして政元暗殺計画を練り上げた。さっそく一色方の加勢城を攻めていた澄之が同城主石川直経と謀叛して急遽京を丹波に引き返し、ここ17日の行水を使っていた政元を暗殺したのである。その余勢を駆って澄之はさらに京都にある政元の館を襲い、後を追江坂神輿へ走った。こうして澄之は政元派が残党を掃い、澄之が細川家の惣領として華々しく登場することとなった。だがそれは束の間の実権であった。

②澄元が澄之を殺して政権を奪う

7月、若江に逃げていた澄元派が、早くも反撃に転じた。最初の火の手は澄之派の内部分裂から起こった。澄之派の幕臣今長忠の子万能丸が澄元に内応して、長忠の居城茨木城を陥落させたのである。それに次いで細川政元にはもう一人の後継者高国が澄元派に加わって澄之を京都の館に襲撃したのである。ここで澄之は敗北され、京都から澄之派が一掃された。かくして一転政元派が京都を制圧し、ここに澄元政権が誕生した。はかなく澄之の天下はたった40日間の幻に終わった。

③三人目の後継者高国が台頭、新たな火種となる

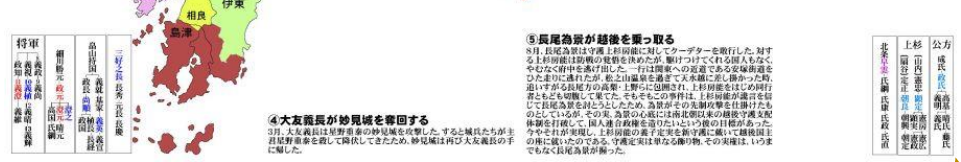
細川家は政元が死に、澄之も死んだ。その過程で旧政元政権の内衆はお家お役御免し、澄元の参謀三好之長がその勢威を拡大していった。ところが澄元の一方で三好之長に反発する勢力が生まれ、彼らの中とんだが高国を担ぎ上げた。やっと澄元が政権を取った矢先に再び細川家が分裂したのである。こんどは細川家が澄元派と高国派に分かれて、またも目被国争へと突き進んでいく。その結果は誰が知ることもなく。

④大友義長が妙見城を奪回する

3月、大友義長は足野寺泰の妙見城を奪還した。すると城氏たちが主君足野寺泰を裏切り降伏してきたため、妙見城は再び大友義長の手に帰した。

⑤長尾為景が越後を乗っ取る

8日、長尾為景は守護上杉房能に対してクーデターを敢行した。対する上杉房能は防戦の覚悟を決めたが、駆けつけてくれる国人もなく、やむなく府中を逃げ出した。一行は関東への近道である安塚街道をひたすらに進んだが、松之山温泉を過ぎて大木峠に差し掛かった時、追いすがる長尾方の高梨・上野らに包囲され、上杉房能をはじめ同行者ともども切腹して果てた。そもそもこの事件は、上杉房能が謀反を信じて長尾為景を討とうとしたため、為景が先制攻撃を仕掛けたのとしていわれ、その実、為景の心底には南北朝以来の被侵字護支配体制を打破して、国人達自政権を造りたいという彼の目標があった。ちゃくれが実現し、上杉房能の養子定実を新守護に戴いて傀儡国主の座に据えたのである。守護定実は単なる飾り物、その実権は、いうまでもなく長尾為景が握った。



1533年　天文2年

政権の流れ　将軍家→細川政元→澄之・澄元・高国→晴元→氏綱　┬三好→松永→信長→秀吉→家康→将軍家
享徳・応仁の乱　明応の政変　戦国時代　天下統一　大坂の陣

本願寺が細川晴元に反旗を翻す

①本願寺一向一揆が細川晴元に反旗を翻す

昨日の友は今日の敵、細川晴元は、これまで本願寺一向一揆の力を借りて敵の細川方を見殺敵鎮一揆に対抗してきたが、こんとは味方であるはずの本願寺一向一揆がその矛先を晴元に向けて働いかかってきた。細川晴元には、本願寺宗徒の驚くべき行動力とその勢力の絶大さに驚き、慌てたのであった。月には細川方の摂津城が襲われ、2月には晴元が居す堺を攻められた。畿内を襲ったあの本願寺一向一揆の攻撃に支えきれなくなった細川晴元は、ついに海路淡路へ脱出。本願寺宗徒の勢力は、ついに淡路島にまで及ぶ。摂津の大半および堺が本願寺宗徒の支配下となることとなったのである。

既元が法華一揆と連合して本願寺一揆を弾圧

細川晴元はこの事態を挽回するために、当時宗論で対立していた法華宗徒を味方に付けて本願寺一向一揆の弾圧を図った。それが功を奏して本願寺勢力がやや弱体化した。その隙を突いて3月、細川晴元は淡路から脱出して摂津城へ入り、ここから法華一揆と連合して本格的な本願寺一揆討伐を始めることになる。

②細田信秀が尾張随一の実力者となる

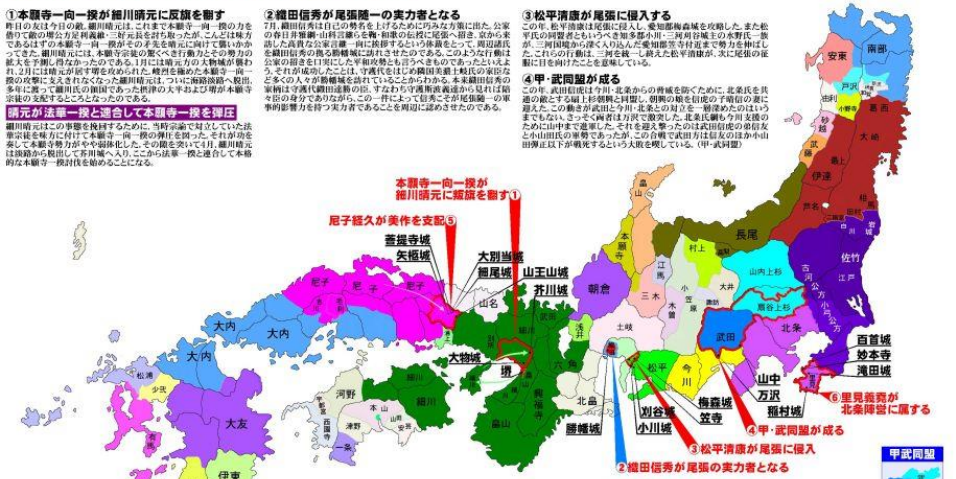
7月、細田信秀は自己の勢力を上げるために巧みな方策に出た。公家の春日井雅綱一由井宗綱を仲・和歌の仲介に尾張へ派遣、京から来訪した高貴な公家音雅一向に接待するという体裁をとって、周辺諸氏を細田信秀の熱心勤補城に訪れさせたのである。このような有職は公家の御意を口実にした平和外交も言うべきものであったといえよう。それが成功したことは、守護代をはじめ隣国美濃土岐氏の家臣な多くの人々が勢補城を訪れていることからわかる。本来細田信秀の本年は守護代細田達勝の出身であったが、わずか守護斯波義達から見れば結々信の身分であるからかしこの一件によって信秀こそが尾張随一の軍事的影響力を持つ実力者であることを周辺に認めさせたのである。

③松平清康が尾張に侵入する

この年、松平清康は尾張に侵入し、愛知郡梅森城を攻略した。また松平氏の同盟者ともいうべき知多郡小田一三河両方城主の水野氏一族が、三河国境から浸く入り込んだ愛知郡笠寺付近まで勢力を伸ばした。これらの行動は、三河を統一し終えた松平清康が、次に尾張の征服に目を向けたことを意味している。

④甲・武同盟が成る

この年、武田信虎は今川・北条らの脅威を除けるために、北条氏を共通の敵とする同盟上杉朝興と同盟し、朝興の娘を信虎の子晴信の妻に迎えた。この婚姻が成因となり甲・北条との対立を一挙解決のためにいうまでもなく、さっそく両者は力所で敵対した。北条氏側も今川支援のために出申まで進軍した。それを迎え撃ったのは武田信虎の弟信友と小山田氏の軍勢が、ここ合戦で武田方は信友の弟小山田信茂以下が戦死するという大敗を被っている。(甲・武同盟)



⑤尼子経久が美作を支配下に納める

1月、尼子経久は美作へ侵入し、菩谷一族が籠もる矢柏城・菩提寺城を、3月には細尾城を攻略。それに続けるかたち別当城の有田氏もまた尼子方に降伏した。その後も尼子経久は在野信に進出し、新発掘貴守の山王山城を攻略するなどして、美作一国を支配下に納めた。

⑥里見義堯が北条陣営に属する

この年、里見氏が相越同盟に本つわる事件を発端に、北条陣営に属するようになった。その事件は7月、里見義堯が叔父の里見義実をこの家臣正本通嘱を福村城に呼ぶつけて謀殺したことから始まった。義芸れた里見実義の子義尚は真里谷武田信隆の義城上総百首城に立て篭もり、北条氏を支援した。その結果、北条水軍と里見義堯との間で中本寺を舞台として戦闘が行われた。かくして北条勢地力は共地で後退し、最後の智慧田城もまなく落城、ついには真里谷武田信隆の消に落ちのびた。ここに里見家は義堯が後継者と定まり、以後北条陣営に属するようになったのである。

1567年　永禄10年

政権の流れ　将軍家→細川政元→澄之・澄元・高国→晴元→氏綱　┬三好→松永→信長→秀吉→家康→将軍家
享徳・応仁の乱　明応の政変　戦国時代　天下統一　大坂の陣

呼称変更
美濃→岐阜

信長が岐阜を攻略、義昭が信長を頼る

①三好義継が松永久秀の許に奔る

この年、三好義継が三好一人衆からの離脱し、仇敵である松永久秀に付いた。そもそも、三好義継は三好家整蓄であり反旗を、若年ながら、その由で政務・軍事の権限を全てこの三人衆に握られていたが、それに不満を持った義継が高屋城を脱出して前泉堺に居る松永久秀の許に身を投ぜたのである。これより三好義継は本圏の敵に回ることとなった。

②松永久秀が大和を奪回し、三好政権打倒を図る

三好義継という強力の新鋭を手にした松永久秀は、政権を奪回すべく大和信貴山城に入り、ついで多聞城に移った。それを追って大和に入ってきた三好三人衆は東大寺大仏殿に陣を張ったが、松永久秀がこれを撃退して火を放った。この兵火で大仏殿は焼失の憂目に遭った。結果三人衆方が大損害を受けて退却した。勝利を勝ち取った松永久秀はそのまま、筒井順慶ら興福寺衆に古敵対していた大和を奪回した。彼はここで三好政権打倒の策を練るが、しかし時すでに遅し。細田信長の脅威がすでに間近まで迫っていることを、未だ知る由もない。

③細田信長が美濃を手中にする

8月、細田信長は美濃へ侵攻し、斎藤龍興の稲葉山城を攻撃した。侵攻をっかけとなったのは、斎藤家の有力家臣である稲葉伊氏で、氏家ト全・安藤伊賀守ら西美濃三人衆が細田信長に内応するとの申し出でたことである。いざ細田信長が西美濃三人衆を味方に付けて岐阜城に攻め込むと、家臣に見放された斎藤龍興は為すすべもなく城を捨てて長島へ逃げた。ここに斎藤家はあっけなく滅び、美濃一国が一気に細田信長の手中に入った。

その後細田信長は居城を稲葉山に移し、地名を岐阜に改定して美濃統治支配の拠点とした。彼はこの頃から天下布武の印章を用い始めている。なお羽柴秀吉が本領を捨て敵前の墨俣砦を造り、美濃攻略の橋頭堡を築いたのは、この前年のことである。

④足利義昭が細田信長を頼る

この年、足利義昭は当時破竹の勢いで勢張していた細田信長を頼って岐阜城へ赴いた。これまで足利義昭は越前の朝倉義景の許で上洛の機会を待っていたが、しかし義景がいっこうに旗揚げの意志をみせなかったので、彼を見限ったのである。相早城に赴いた足利義昭はさっそく細田信長に上洛を懇願、信長はそれを快諾し、即座に旗揚げの準備に取り掛かった。

ちょうどその頃、松永久秀が細田信長に面会を通じてきたので、「久秀を大将として上洛を迎えよ」と旗内の諸将に向けて朱印状が出された。ここから波内の戦国が大転換する。

⑤細田信長が北伊勢に侵入する

この春、細田信長は南伊一益を先駆として北伊勢に侵入、長島・桑名・多度方面を攻め取り、員弁郡と桑名郡を信長の支配下に収容した。その後さらに三郡へ侵入し、8月には蜂城を陥れた。伊勢に本拠を置く南北朝時代が守る長家に対して、ここに斎藤家はあっけなく滅び、ついに国内を解いて引き揚げた。その後者は翌年に持ち越される。

⑥細田信長と浅井氏政が同盟を結ぶ

浅井長政が細田信長の妹を結婚して同盟が結ばれる。

⑦三村元親が宇喜多直家を攻めるも敗退する

この年、三村元親は父家盟の仇宇喜多直家を撃てるために、長二方を率いて上道郡に入り、直家の拠点備前明神寺城を攻略した。その後三村元親は宇喜多直家を討つべく居城沼城に向かおうとした折、ここで直家の謀略に陥かって惨敗って敗北した。三村方の金・中島氏が宇喜多直家に籠絡で寝返され、三村勢を明神寺城の城外へ誘き出す計略を授けられていたのである。果たして三村勢はその計略にはまって城外へ出陣、そこへ宇喜多軍が襲いかかって明神寺城が占領された。結果、三村家盟は孤立れも空しく敗中へ逃げ帰った。

⑧河野が喜多郡に侵入

この頃河野氏は一条・長宗我部連合軍に対抗するため、毛利氏と同盟を結んだ。その後乃若を得た河野氏は喜多郡大洲城の城子一族を攻め取ってこれを落とし、一条氏の傘下にあり手郡宮氏の勢力圏内に楔を打ちこんだ。

⑨薬師寺が島津に頼る

麦明隣秋村但長義国の後援を頼んで島津貴久に敗戦を願った。そのため島津軍は11月、麦明隣秋の居城城に攻撃を仕掛けた。麦明一相良軍は大口まで撤退し、翌年二月に大口城が島津軍によって攻略される。

⑩毛利軍と大友軍が筑前で衝突する

大友宗麟の重臣高橋鑑種が叛意を起こした。高橋が宗麟の鳥色に怒ったためらいし、この叛乱に筑前国内の有力国人秋月種実・筑紫広門・原田隆種らをはじめ宗像・麻生氏も加わり、大宰府天満宮の神官・鳥居たちも高橋に与して宝満・岩屋城に入った。大友宗麟は戸次道雪らに豊後・肥後・筑後の軍勢をつけて高橋鑑種を攻撃させた。岩屋城はすぐ落城したが宝満城は難攻不落の要害で持久戦の様相を呈した。これに力刑元春・小早川隆景らも利軍と、さらに毛利と同盟を結んでいた龍造寺隆信が加わって支援したので、この宝満城は大友と毛利の衝突現場となった。

⑪甲相駿三国同盟が解消、岐・甲同盟が締結

この年、細田氏は5月に上洛の国目を保証した。これは細田・徳川に接近して岐・甲同盟を結んだ。三国同盟を解消したのは、今川氏が上杉謙信と組んで、武田信玄に敵対する路線に転じたからである。また二の頃、徳川家康の勢力が今川領の遠江国人に及んでおり、家康による西からの脅威が武田信玄の心に少なからぬ動揺を与えたこともその一因だろう。武田信玄にとって駿河は、上洛する時の武蔵道経路を手にするために不可欠の国であったので、この事態は家康に敵意さえ抱くことを見通してすらけにはいかなかったのである。そこで武田信玄が選んだ道は細田・徳川との同盟であった。9月には武田信玄の娘と細田信長の嫡男信延との婚約が成立し、ここで遠江は徳川が、駿河は武田が略取するという密約が取り交わされた。

⑫北条氏が御船台で里見軍に惨敗

8月、北条軍と里見軍が上総御船台で衝突した。この頃、里見義弘はすでに内上総の要衝佐貫城を奪回し、また久留里城も里見義政の居城として早好していた。そんな中、北条氏政が里見軍の北上を食い止めるために、岩付城主の太田氏資を上総に派遣したのである。真里は鶴亀山で撃ち合った。この合戦で太田氏資が戦死するなど、北条軍が全滅するという惨敗を喫した。

1575年　天正3年

織田・徳川連合軍が長篠の戦いで武田軍に大勝利

①細田・徳川連合軍が長篠で武田に大勝利

5月、細田・徳川連合軍と武田勝頼が長篠で激突した。敵の二攻略を開けたのは武田方であった。武田勝頼は二河一進本・牛久保・吉田の諸城に兵を進めた。彼は、長篠で長篠城を陥入、長篠城を陥落寸前にまで追い込んだ。その時の出来事で、以下の通り有名な逸話が残っている。守将奥平貞昌はこの急を徳川家康に告げるために鳥居強右衛門に、その伝令役を命じた。強右衛門は、長篠城を抜け出し城の敵陣を徳川家康に伝えることができたが、その帰城途中、逆恨べ武田軍に捕らえられてしまった。武田方は助命と恩賞を条件に、長篠城中に向かって「未援軍なし」と偽りの報告をするよう強要したが、強右衛門は、「城の敵陣を通り抜けて大音声で「細田・徳川連合軍の到着近し」と叫んだ。激怒した武田方は強右衛門を磔にした。長篠城中は、この報告を聞いて大いに奮起して敵を撃ち破ったのである。敗北の二日後、武田勝頼は、長篠を捨てて後の世に語り継がれている。

5月18日、総勢二万八千人の細田・徳川連合軍は長篠に到着、敵本陣に一進一退の馬場信春を設け、この戦いを迎撃した。この日本明に徳川方の別働隊が武田軍の背を急襲、武田軍の背後を突いて鉄砲の一斉射撃を浴びせた。その結果、武田軍は退却を余儀なくされ、月波平定が振り出しに戻った。

②細川家康が遠江北部を奪回する

長篠の戦いで勝利した徳川家康は、武田軍が敗戦の隙を衝してなりを チャンスに遠江の平定を急いだ。6月には[illegible]城を落とし、8月には諏訪原城を攻略した。同月、さらに小山城を攻めようとした時、ようやく体制を立て直した武田勝頼が、小山城から高天神城までの防衛を固めてきたので、徳川家康は一気に高天神城へ向かって、その手前の一帯を北部の三段城に移した。一段城は武田の拠点が来ぬまま兵員が足り落城。ここに高天神城を残す遠江が全て徳川家康の手に帰した。

③細田信長が越前・加賀南部を平定する

長篠の戦いで武田の脅威を封じた細田信長は、次に越前に向けて本腰を一向一揆の討伐軍を発した。8月、細田軍は岩浦のごく頃前に侵入、本の身軽を突破し、そこから前中へ進げた一揆勢の六千人を撃百人。山々に逃げ上った者は男女かまわず切り捨てにせまとの厳命を出した。結局的に、二千人が殺されて一揆は壊滅。ここ前前の細田信長によって平定された。

細田信長はその後一挙谷に陣を敷して加賀へ進撃し、手取川南岸まで進出。ここ前の一揆は、一向一揆の本拠地である加賀南部を平定した。

④細田信長が明智光秀に丹波攻略を命じる

越前の平定を終えた細田信長は荒木村重に播磨の平定を命じた。さっそく播磨に入った荒木村重は、摂津の石山本願寺の敵対から反旗を翻して細田方に引き込み、浦上宗景の天神山城に残る敵を撃ち滅ぼし、播磨国人への地固めを行った。そして10月、小寺政職・浦上宗景・別所長治・赤松氏・山名祐豊らが上洛して細田信長に謁見し、信長への協力を誓った。

⑤山名祐豊が毛利と同盟、織で細田とも結ぶ

この頃但馬では毛利方と細田方との対立が起こっていた。牽々前城の短尾氏・竹田城の太田垣氏らは毛利方で、被等は但馬での尼子の勢力を駆逐するために毛利軍に出陣を要請した。一方敵城の田結氏は細田方に付き、尼子勢久を支援した。これらの国人を統括する立場にある但馬守護山名祐豊は、両勢力の抗争で毛利と細田のどちらの側につくかで揺れ動いていた。そんな折の1月、毛利軍がのびてくるとの報に接した山名祐豊は、ついに毛利と同盟を結んだ。しかしこれは表向きの同盟であり、裏では密かに細田方にも通じるという二重外交をかっていた。現に10月には浦上氏と共に京都に赴いて細田信長に謁っている。

⑥細田信長が播磨を平定する

越前の平定を終えた細田信長は荒木村重に播磨の平定を命じた。さっそく播磨に入った荒木村重は、摂津の石山本願寺の敵対から反旗を翻して細田方に引き込み、浦上宗景の天神山城に残る敵を撃ち滅ぼし、播磨国人への地固めを行った。そして10月、小寺政職・浦上宗景・別所長治・赤松氏・山名祐豊らが上洛して細田信長に謁見し、信長への協力を誓った。

⑦細田信長が東美濃を奪回する

11月、細田信長は信忠に東美濃の奪回を命じ、岩村城の攻略に取り掛かかりさせた。細田信忠が水晶山に陣を奪くと、さっそく武田勝頼の救援が本神に次の策せて東方へ出た。信忠は、信忠は岩村城へ向かい、同城の救援を撃退した。結果、守将の秋山虎方は城を支えることが出来ず開城、東美濃が細田信長の手に渡った。

⑧龍造寺が筑前西部を支配

この年、龍造寺隆信は北九州の征服を目論む大友宗麟に佐賀城を明け渡した。龍造寺一族は、筑前国内の国人衆は重臣の鍋島直茂に、鍋田長政らの諸将を配置した。龍造寺隆信は、筑前の国人衆を味方に付けるために、その恩賞として大友宗麟の支配下にあった筑前の国人衆の領地を割き与えた。その結果、筑前の国人衆は、大宰府天満宮の神官・原田隆種らを中心に、宝満・岩屋城に入った。大友宗麟は戸次道雪らに豊後・肥後・筑後の軍勢をつけて高橋鑑種を攻撃させた。岩屋城はすぐ落城したが宝満城は難攻不落の要害で持久戦の様相を呈した。これに力刑元春・小早川隆景らも利軍と、さらに毛利と同盟を結んでいた龍造寺隆信が加わって支援したので、この宝満城は大友と毛利の衝突現場となった。

⑨尼子勝久が挙兵、因幡八東郡を占領する

昨年末から、毛利軍は備中の攻略に乗り出し、国司・横・鬼豊などの諸城を陥れた後、今年5月に細山城を落として備中の支配者三村元親を自滅させ、さらに最後に残る三村一族の拠点富山城に押し寄せ、城主上野隆徳以下全員を討死させた。ここに備中は毛利軍の支配下に入った。

⑩毛利軍が備中を平定する

昨年末から、毛利軍は備中の攻略に乗り出し、国司・横・鬼豊などの諸城を陥れた後、今年5月に細山城を落として備中の支配者三村元親を自滅させ、さらに最後に残る三村一族の拠点富山城に押し寄せ、城主上野隆徳以下全員を討死させた。ここに備中は毛利軍の支配下に入った。

⑪長宗我部元親が土佐を統一する

この年、長宗我部元親は一条家家臣の手引きでその領国幡多郡中村城に侵入した。これは昨年、一条家定の乱行ぶりに不満を持つ一家臣たちが、上方の兼定を伊予に追放し、その後釜に長宗我部元親をよういう。ついで長宗我部元親は一条家と戦うことを幡多郡の占領が実現した。一方伊予に逃げった一条家定は、所領回復を目指して反撃を開始、法華津氏らの支援を得て宿毛に攻め入り、さらに進んで西川の要塞に城を構えた。対する長宗我部元親は、西川の要塞に一挙に進撃して攻撃を仕掛けた。結果、一条家